若越郷土研究　五十五巻一号

# 笏谷石製唐破風屋根付墓標の屋根の形式について

三井紀生

## はじめに

近世初期以降、越前で産する笏谷石を素材とした石造物は、三国湊から日本海沿岸の各地へ移出されてきた。各地に遺されている笏谷石製の石造物を年代に従って大別すると、慶長年間から慶安年間末（一五九六～一六五一年）頃までの紀年銘を有するものとして、石鳥居、多層塔、多宝塔、石廟、宝篋印塔、五輪塔など大・中形の石塔類が見られるが、これらは藩や豪商の廻船などによって移出されたものと考える。そして十七世紀中期以降、大形の石造物は徐々に影をひそめ、寛文年間（一六六一～七二年）ごろから小形の石塔類の移出がはじまり、延宝年間（一六七三～八〇年）以降急増し元禄から宝永・正徳年間（一六八八～一七一五年）にピークを迎え、享保年間以降（一七一六年～）減少の途をたどっている。

小形の代表的な笏谷石製石塔に越前式唐破風屋根付墓標（以下唐破風屋根付墓標）がある。平成十八年、「唐破風屋根付墓標の分布」[1]と題してこの墓標の各地における年代別の所在状況と近世日本海航路変遷との関係などを『越前笏谷石　続編』で報告した。

この墓標は、上方と北方地方を繋ぐ日本海ルートがまだ敦賀や小浜を中継地（ターミナルポイント）としていた時代、すなわち十七世紀中頃から十八世紀中頃の間に数多く移出され、北海道（江差・松前）、上北および下北地方をはじめ出羽地方など日本海側の各地に今も数多く遺されており、当時日本海航路を運行するために不可欠な船のバラストを兼ねた貴重な商品であったことを証する遺品群である。

この墓標に関しては可能な限り銘文を記録し、採寸と写真撮影をおこない、小形の墓標の中ではとくに重点的な調査をしてきた。そして、調査の過程で屋根の部分に幾種類かの

組合せがあることに気付き、小松市在住の頃、江沼地方史研究会の機関誌『えぬのくに』に「北陸地方に所在する唐破風屋根付墓標の分布」[2]と題して寄稿、この中で屋根の部分についても簡単に触れた。その後調査地域を拡大するとともに調査数も増やしてきたので、本稿ではこの墓標の屋根廻りの形式について、その種類とそれぞれの数量・比率、またそれぞれの形式が時代の変遷によって変化しているかなどの検討を試みた。

## 一、唐破風屋根付墓標の基本形式

唐破風屋根付墓標は、笏谷石利用の歴史の中で生まれた越前オリジナルの墓標である。この墓標のもっとも数が多い形式の概略図と各部の名称を**図1**に示すが、構成は基礎と標身（墓標本体）から成り、両者は枘によって組合せられている。

基礎は上端に反花を彫り、前方は一段低くして華燭・香台を配置している。華燭・香台部分を有していない基礎も多い。

標身は、板碑状（石板を使用）で、前面は輪郭をとり、その内側に法名や没年などを彫る。背面は前面のような加工はせず鑿の跡を残す。

屋根は、切妻造り起り屋根で、棟前方先端に丸形の鬼板を彫り、軒は左右にオーバハングし先端に蕨手を有し、破風部分中心振り分け左右二か所に茨を配している。

屋根部分の装飾の方法（以降「荘厳形式」という）はこの図のほかにもいくつかの種類がある。

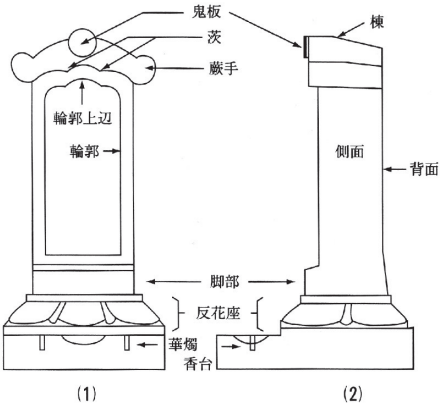



図1　唐破風屋根付墓標の各部の名称
（『富山市日本海文化研究所紀要8号）』[3]から引用）

## 二、調査先と調査数の概要

平成二十一年末の時点（年々新しい調査を加えているので調査数が増加しており、今後も増える見込みであるが）において、日本海沿岸地方を中心に各地で一千九百七十五基の唐破風屋根付墓標を調査した。すでに無縁化して廃棄された墓標も多くあるだろうが、現存しているほとんどの墓標も造立後二百～三百五十年経過しており、破損や表面の風化が進展して銘文を確認できる数も少なくなってきている。各地の調査で紀年銘を確認することができた墓標は五百八基（在紀年銘率二十五・七パーセント）であった。そして、紀年銘が残され、かつ屋根部分の個々の荘厳形式がはっきり確認できる墓標三百一基（在紀年銘数の五十九・三パーセント）を分析の対象（調査数）にした。**表1**に三百一基の所在先を示すが、日本海沿岸の広い地域にわたっている。

## 三、屋根まわりの荘厳形式とその組合せ

### （一）屋根まわりの荘厳形式

唐破風屋根付墓標の基本形式の節で述べたように、屋根各部の荘厳形式に幾種類かのバ

表１　唐破風屋根付墓標の屋根の形式調査寺院と調査数

（対象；屋根の形状が保存されかつ紀年銘が残されている墓標）

| 地域 | 寺院名 | 所在地 | 調査数（基） | 地域 | 寺院名 | 所在地 | 調査数（基） | 地域 | 寺院名 | 所在地 | 調査数（基） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 越　前 | 滝谷寺 | 坂井市 | 45 | 加　賀 | 実性院 | 加賀市 | 7 | 下　北 | 小目名 | むつ市 | 1 |
| (17か所) | 性海寺 | 同　上 | 39 | 能　登 | 全昌寺 | 同　上 | 9 | 上　北 | 大安寺 | 同　上 | 2 |
| | 通安寺 | 福井市 | 13 | (12か所) | 那谷寺 | 小松市 | 3 | (14か所) | 本門寺 | 同　上 | 2 |
| | 泰清院 | 同　上 | 5 | | 永光寺 | 羽咋市 | 1 | | 宝国寺 | 同　上 | 2 |
| | 妙観寺 | 同　上 | 4 | | 妙成寺 | 羽咋市 | 9 | | 心光寺 | 同　上 | 5 |
| | 朝倉屋敷 | 同　上 | 6 | | 石動山 | 中能登町 | 12 | | 泉龍寺 | 同　上 | 1 |
| | 大谷寺 | 越前町 | 4 | | 総持寺 | 輪島市 | 3 | | 本覚寺 | 同　上 | 1 |
| | 善導寺 | 大野市 | 2 | | 長齢寺 | 七尾市 | 3 | | 多善寺 | 同　上 | 1 |
| | 洞雲寺 | 同　上 | 1 | | 龍門寺 | 同　上 | 7 | | 円通寺 | 同　上 | 7 |
| | 長久寺 | 鯖江市 | 1 | | 妙圀寺 | 同　上 | 2 | | 常念寺 | 同　上 | 1 |
| | 正覚寺 | 越前市 | 4 | | 妙観寺 | 同　上 | 2 | | 発信寺 | 佐井村 | 2 |
| | 引接寺 | 同　上 | 7 | | 上日寺 | 能登町 | 4 | | 常光寺 | 野辺地町 | 3 |
| | 金剛院 | 同　上 | 10 | | 小　計 | | 62 | | 海中寺 | 同　上 | 1 |
| | 積善寺 | 同　上 | 1 | 越　中 | 国泰寺 | 高岡市 | 6 | | 対泉院 | 八戸市 | 1 |
| | 妙泰寺 | 南越前町 | 4 | (2か所) | 上日寺 | 氷見市 | 5 | | | | |
| | 来迎寺 | 敦賀市 | 1 | | 小　計 | | 11 | | 小　計 | | 30 |
| | 西福寺 | 同　上 | 3 | 出　羽 | 安国寺 | 鶴岡市 | 1 | 渡　島 | 光善寺 | 松前町 | 5 |
| | 小　計 | | 150 | (7か所) | 常念寺 | 同　上 | 1 | (6か所) | 龍雲院 | 同　上 | 4 |
| 若　狭 | 発心寺 | 小浜市 | 13 | | 正徳寺 | 酒田市 | 2 | | 法幢寺 | 同　上 | 3 |
| (4か所) | 仏国寺 | 同　上 | 5 | | 海晏寺 | 同　上 | 1 | | 松前家墓所 | 同　上 | 1 |
| | 空印寺 | 同　上 | 1 | | 妙法寺 | 同　上 | 4 | | 法源寺 | 同　上 | 1 |
| | 極楽寺 | 同　上 | 1 | | 永泉寺 | 遊佐町 | 1 | | 寿養寺 | 同　上 | 3 |
| | | | | | 蚶満寺 | にかほ市 | 1 | | 小　計 | | 17 |
| | 小　計 | | 20 | | 小　計 | | 11 | 合　計 | | | 301 |

リエーションがあり、**表2**にこれまでに確認した中から例を一覧にした。

**鬼板**　棟の前方先端部に配置されている鬼板は「丸形」と「五角形」の二種類がある。

**屋根の表面**　基本は切妻造り構造の屋根であるが、屋根の表面は次の三種類がある。

・起（むく）り形　表面が凸型をした屋根（直線で、起りが見られない屋根もある）

・照り起（むく）り形　上流側の凸型（起り）と下流側の凹型（照り）を組み合わせた大波曲線状の屋根

・桟瓦葺形　桟瓦葺きしたように、表面が小波曲線を描く屋根

**屋根先端の軒の形状**　つぎの三種類がある。

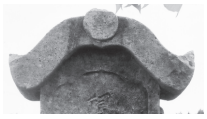
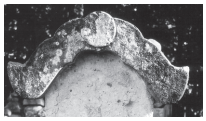
・蕨手　先端が丸く巻き上がった形状（蕨手という）のもの

・軒先端が巻き上りではなく、はね上がって先端が尖った蟇股状のもの（広義では蕨手の範疇に含める）

・蕨手がなく、先端の側面が垂直になっているもの

**茨の数**　破風部分に配置される茨の数は四種類ある。

表２　唐破風屋根の形式例

| 鬼板形状 | 屋根表面 | 蕨手有無 | 茨の数：無 | 1個 | 2個 | 3個 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 丸形 | 起り形 | 有 | <br>貞享3(1686)年銘<br>石動山(石川県中能登町) | <br>元禄2(1689)年銘<br>発信寺(青森県佐井村) | <br>宝永5(1708)年銘<br>法幢寺(北海道松前町) | <br>元文4(1739)年銘<br>金剛院(越前市) |
| | 照り起り形 | 有・蟇股状 | ――　　――　　――　　―― |  <br>寛文12(1672)年銘<br>大安寺(むつ市大畑町) | | |
| | | 無 | <br>寛文7(1667)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | <br>天保12(1841)年銘<br>金剛院(越前市) | <br>元禄13(1700)年銘<br>滝谷寺(坂井市三国町) | |
| | 桟瓦葺形 | 有 | <br>天和元(1681)年銘　(参考)<br>寿養寺(北海道松前町) | <br>寛文12(1672)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | <br>延宝3(1675)年銘<br>泉龍寺(むつ市川内町) | <br>延宝5(1677)年銘<br>通安寺(福井市西木田4) |
| | | 有・蟇股状 | ――　　――　　――　　―― | |  <br>寛文13(1673)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | |
| 五角形 | 起り形 | 有 | <br>延宝4(1676)年銘<br>泰清院(福井市) | ――　　――　　――　　―― | | |
| | 照り起り形 | 有・蟇股状 | ――　　――　　――　　―― | <br>寛文10(1770)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | | |
| | | 無 | <br>寛文12(1672)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | <br>明暦2(1656)年銘<br>性海寺(坂井市三国町) | <br>延宝2(1674)年銘<br>寿養寺(北海道松前町) | <br>延宝6(1678)年銘<br>通安寺(福井市西木田4) |
| | 桟瓦葺形 | 有・無 | ――　　――　　――　　―― | | | |

備考１　表中「――」は、これまでの調査の中では認められなかったもの。
出現したとしても稀で、その数は非常に少ないと考える。

・茨なし
・一個　破風中央に一個
・二個　破風中央振り分け左右に各一個
・三個　破風中央と左右に各一個

### （二）屋根の荘厳形式の組合せ

唐破風屋根付墓標の屋根の形式は、右に述べた荘厳形式を無作為に組合せたのではなく、一定のルールによって組合せられている。これを具体的にするために、三百一基の墓標を**表2**の分類に従って**表3**を作表した。この2つの表により組合せや系列を把握することができる。その基本になっているのは鬼板の形状で、丸形か五角形かのいずれかによって屋根の表面や軒先の荘厳形式が決められていると考えられる。

（1）丸形の鬼板を有している墓標数は二百四十三基で全体の八十・七パーセントを占め、このうち二百二十三基（丸型全体の九十一・七パーセント）は、屋根の表面形状が「起り形」で軒の先端に蕨手を有している。なお、丸形の鬼板を有し、屋根表面の形状が「照り起り形」を呈している墓標が六基（丸形全体の二・五パーセント）あり、内二基は軒先端が「蟇股状」、四基は「蕨手なし」であった。

（2）同じ丸形の鬼板を有する「桟瓦葺形」屋根の墓標が十四基（丸形の五・八パーセント）

表3　唐破風屋根の形式別墓標数　（基）

| 鬼板の形状 | 屋根の表面 | 蕨手の有無 | 茨の数(個) 無 | 1個 | 2個 | 3個 | 合計 墓標数 | 割合(%) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 丸形 | 起り形 | 有 | 53 | 59 | 109 | 2 | 223 | 74.1 |
| | 照り起り形 | 有(蟇股状) | | 2 | | | 2 | 0.7 |
| | | 無 | 1 | 1 | 2 | | 4 | 1.3 |
| | 起り形・照り起り形計 | | 54 | 62 | 111 | 2 | 229 | 76.1 |
| | 桟瓦葺形 | 有 | (注1)1 | 1 | 6 | 4 | 11 | 3.7 |
| | | 有(蟇股状) | | | 2 | 1 | 3 | 1.0 |
| | | 無 | | | | | 0 | 0.0 |
| | 桟瓦葺形計 | | 0 | 1 | 8 | 5 | 14 | 4.7 |
| | 丸形計 | | 54 | 63 | 119 | 7 | 243 | 80.7 |
| 五角形 | 起り形 | 有 | 1 | | | | 1 | 0.3 |
| | 照り起り形 | 有(蟇股状) | | 1 | | | 1 | 0.3 |
| | | 無 | 14 | 14 | 27 | 1 | 56 | 18.6 |
| | 起り形・照り起り形計 | | 15 | 15 | 27 | 1 | 58 | 19.3 |
| | 桟瓦葺形 | 有 | | | | | 0 | 0.0 |
| | | 有(蟇股状) | | | | | 0 | 0.0 |
| | | 無 | | | | | 0 | 0.0 |
| | 桟瓦葺形計 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0 |
| | 五角形計 | | 15 | 15 | 27 | 1 | 58 | 19.3 |
| 合計 | | | 69 | 78 | 146 | 8 | 301 | 100.0 |

（注1）　**表2**で「参考」として示した墓標で、本統計に「1」と表示したが合計には含めていない。

あるが、これらの軒先端は、蕨手（蟇股状蕨手を含む）を有している。

桟瓦葺形は大形の墓標に多く、十四基中十基は標身の高さが三尺（約九十一センチ）を超えるものであった。

（3）五角形の鬼板を有している墓標は五十八基（全体の十九・三パーセント）である。うち五十六基（五角形全体の九十六・六パーセント）は屋根表面の形状が「照り起り形」で、軒先端に蕨手を有していなかった。残り二基のうち一基は照り起り形で蟇股状蕨手を有し、もう一基は起り形で蕨手を有している様式であった。また、五角形の鬼板で屋根が桟瓦葺形の墓標は観察されなかった。

（4）茨の数は、三百一基のなかで二個有している墓標が百四十六基（四十八・五パーセント）、一個が七十八基（二十五・九パーセント）、茨なしは六十九基（二十二・九パーセント）、で三個の茨を持つ墓標は僅かに八基（二・七パーセント）だけである。

茨の数は、鬼板の形状、屋根の形状、蕨手の有無に無相関と考える。なお、三個の茨は大形の墓標に散見される。

以上の分析結果をまとめると、唐破風屋根付墓標の基本形式は、破風部分の茨の数にバリエーションはあるが、

（ア）丸形鬼板、起り屋根、蕨手ありの組合せが全体の七十四・一パーセントを占め、最も標準的な形式といえる。この中で二個の茨を有する墓標は約半数の三十六・二パーセントを占め、全ての組合せの中で最も数が多い（この形式の概略図を**図1**に示した）。

（イ）丸形鬼板付、桟瓦葺形屋根、蕨手あり（蟇股状蕨手を含む）の組合せは四・七パーセントで、大形の墓標に見られる。この墓標は、広義では屋根の表面だけを変えた（ア）項の類似の形式と考えてもよいだろう。

（ウ）五角形鬼板、照り起り屋根、蕨手なしは十八・六パーセントであった。

（ア）と（ウ）の形式で九十二・七パーセントを占め、主たる形式はこの二種類であったと結論づけたい。

## 四、年代別所在数の分布

前記の三百一基を慶安三年（一六五〇年）以降明治二年（一八六九年）までの二百二十年を十年間隔に区切り、各年代の墓標数を**表4**に示した。この表に、鬼板の形状（丸形または五角形）区分と蕨手の有無を組み合わせた墓標数も併記した。

（1）これまでの調査範囲では、現存する最古の紀年銘を有する墓標は、滝谷寺（坂井市三国町）所在の承応二年（一六五三年）銘であるが、越前をはじめそれぞれ移出されてきた地方に共通していえることは、各地とも寛文年間頃から移出がはじまり、延宝年間から宝永・正徳年間にピークを迎え、享保年間以降減少に転じている。（『越前笏谷石続編』[1]）。

（2）丸形の鬼板を有する墓標が最も多い時期は元禄三年（一六九〇年）から享保四年（一七一九年）で、この三十年間の墓標数は百十四基（四十六・九パーセント）を占める。

表４　年代別分布（鬼板の形状、蕨手の有無別）　（基）

| 年代 | | 丸形鬼板付墓標 | | | 五角形鬼板付墓標 | | | 合計 | （参考）在紀年銘全数の分布 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 和暦 | 西暦 | 蕨手有 | 蟇股状蕨手有 | 蕨手無 | 蕨手有 | 蟇股状蕨手有 | 蕨手無 | | |
| 慶安３－万治２ | 1650－1659 | 3 | | | | | 1 | 4 | 4 |
| 万治３－寛文９ | 1660－1669 | 12 | 1 | 1 | | | 5 | 19 | 20 |
| 寛文10－延宝７ | 1670－1679 | 14 | 4 | | 1 | 1 | 13 | 33 | 33 |
| 延宝８－元禄２ | 1680－1689 | 17 | | 1 | | | 10 | 28 | 47 |
| 元禄３－元禄12 | 1690－1699 | 29 | | | | | 9 | 38 | 67 |
| 元禄13－宝永６ | 1700－1709 | 46 | | 1 | | | 3 | 50 | 70 |
| 宝永７－享保４ | 1710－1719 | 38 | | | | | 6 | 44 | 75 |
| 享保５－享保14 | 1720－1729 | 16 | | | | | 2 | 18 | 43 |
| 享保15－元文４ | 1730－1739 | 17 | | | | | 3 | 20 | 25 |
| 元文５－寛延２ | 1740－1749 | 15 | | | | | 2 | 17 | 28 |
| 寛延３－宝暦９ | 1750－1759 | 5 | | | | | | 5 | 22 |
| 宝暦10－明和６ | 1760－1769 | 2 | | | | | 1 | 3 | 17 |
| 明和７－安永８ | 1770－1779 | 3 | | | | | | 3 | 14 |
| 安永９－寛政元 | 1780－1789 | 3 | | | | | | 3 | 9 |
| 寛政２－寛政11 | 1790－1799 | 5 | | | | | | 5 | 10 |
| 寛政12－文化６ | 1800－1809 | 5 | | | | | | 5 | 10 |
| 文化７－文政２ | 1810－1819 | 2 | | | | | | 2 | 7 |
| 文政３－文政12 | 1820－1829 | | | | | | | 0 | 1 |
| 天保元－天保10 | 1830－1839 | | | | | | 1 | 1 | 1 |
| 天保11－嘉永２ | 1840－1849 | 1 | | 1 | | | | 2 | 4 |
| 嘉永３－安政６ | 1850－1859 | | | | | | | 0 | 0 |
| 万延元－明治２ | 1860－1869 | 1 | | | | | | 1 | 1 |
| 合計 | | 234 | 5 | 4 | 1 | 1 | 56 | 301 | 508 |

備考１　統計は平成21年末時点までの調査データによる。
（調査全数1,975基、うち在紀年銘全数508基、在紀年銘率25.7％）

一方五角形鬼板を有する墓標が最も多い時期は、寛文十年（一六七〇年）から元禄十二年（一六九九年）で、この三十年間の墓標数は三十四基（五十八・六パーセント）を占める。丸形が最も多くなる時期、五角形はすでに減少期になっていたと考えられる。

## 五、地方で造られた唐破風屋根付墓標の屋根の形式

（越前式）唐破風屋根付墓標が各地へ移出されるようになってから、それぞれの地では越前式を模して造ったと思われる墓標（ご当地形）が散見される。各地の調査時に確認したいくつかの例を参考として**表５**に示す。

これらは越前式の墓標とよく真似ているものも見られるが、それぞれが越前式とはどこか異なる点を有しているものの方が多い。このように考えると、細部まで系列化され、この系列に従って同じものが大量に造られて各地へ移出されている越前式の墓標に驚きを感ずるのである。

表５　地方で造られた唐破風屋根付墓標

| No | 寺院名 | 所在地 | 和　暦（年） | 西　暦（年） | 標身高さ（cm） | 屋根の表面 | 鬼板形状 | 茨の数 | 蕨手 | 石　材 | 越前式との違い 墓碑の特徴など |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 光善寺 | 松前町 | 明和 2 | 1765 | 未計測 | 照り 起り | 丸 | 1 | なし | 砂岩 | 標身前面に輪郭なし |
| 2 | 松前家墓所 | 松前町 | 慶安 2 | 1649 | 103.0 | 照り | 丸 | なし | なし | 凝灰岩（笏谷石） | 頭部が山形の墓標に、後刻屋根を追加したと思われる |
| 3 | 麟勝院 | 秋田市 | 享保18 | 1733 | 露出部 60.0 | 起り | なし | 1 | あり | 凝灰岩 | 全体の形は越前の屋根組合わせ形を一体化したデザイン、鬼板なし |
| 4 | 麟勝院 | 秋田市 | 不詳 | 不詳 | 96.0 | 起り | 丸 | 1 | なし | 凝灰岩 | 丸形鬼板、起り屋根、蕨手なし、（軒先下端は円弧を描く） |
| 5 | 大悲寺 | 秋田市 | 寛文 5 | 1665 | 112.0 | 桟瓦葺 | 丸 | 1 | あり | 凝灰岩 | 屋根前面と標身前面が同一平面鬼板、破風、茨、蕨手は陰刻 |
| 6 | 大悲寺 | 秋田市 | 享保12 | 1727 | 93.5 | 起り | 丸 | 1 | あり | 凝灰岩 | 越前の屋根組合わせ形を一体化したデザイン、屋根部が特に厚い |
| 7 | 妙成寺 | 羽咋市 | 不詳 | 不詳 | 82.5 | 照り 起り | 五角 | 1 | なし | 戸室石 | 標身が下端方向に向って極端に厚くなっていく |
| 8 | 来迎寺 | 敦賀市 | 不詳 | 不詳 | 63.0 | 起り | 丸 | なし | あり | 花崗岩 | 薄い屋根、起りが大きい |

写真

1

2

3

4

5

6

7

8

## 六、おわりに

各地に所在する唐破風屋根付墓標の種類、とくに屋根の形式を個々に見ると、非常に多くのバリエーションがあるように見えるが、統計的に分析して整理してみるといくつかの基本となる組合せで規則正しく造られていることがわかる。また、時代の要請に応じた流行を感じさせるものもあるが、同じ種類の墓標が、同じ時代に、しかもこのような広い範囲に分布していることに非常に興味深いものがあった。

注

（1）三井紀生著『越前笏谷石　続編』１０７頁「唐破風屋根付墓標の分布」福井新聞社　平成十八年発行

（2）三井紀生「北陸地方における越前式唐破風屋根付墓標の分布に関する考察」（『えぬのくに』第四十九号　江沼地方史研究会　平成十五年発行に所収）

（3）「富山湾沿岸における越前式笠付墓標分布調査報告書」（『富山市日本海文化研究書紀要八号』富山市日本海文化研究所　平成七年に所収）